

序論：近代世界とキリスト教
第1講：啓蒙思想のインパクト
第2講：宗教学と宗教本質論

1：理神論とカント

1 - 1: ドイツ古典哲学の宗教論

1 - 2: 啓蒙主義の宗教論 - 理神論(Deism)

9. カント『単なる理性の限界内の宗教』

Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft 1793

神への道は、理論理性から実践理性へ。宗教の倫理化・内面化

10. 理論理性から実践理性へ

神、自由、不死性：超越的理念

理論理性によっては肯定も否定もできない

神の存在論証の不可能性

理性の事実としての道徳的命法の無制約性

徳と福との一致

11. ロマン主義的反動(民族、神話、美、感情)

12. ヘーゲルの総合(近代ドイツ哲学による総合の頂点)

2：シュライエルマッハー

2 - 1: シュライエルマッハーの特徴

近代プロテスタント神学の父

啓蒙思想とロマン主義の総合

カント・フィヒテ

ロマン主義運動

体系構想(神学 - 哲学)

ヘルンフォート兄弟団

1796(29)

1810(42)

ハレ大学神学部(宗教的懐疑)

ベルリン

ベルリン大学神学部

1787(19)

『宗教論』

『モノローゲン』

解釈学・弁証法・倫理学、体系家 信仰論

『宗教論』(Reden)と『信仰論』(Glaubenslehre)

2 - 2: 『宗教論』の信仰概念

1. 信仰・宗教の規定

意図：宗教の独自性 - 宗教学の基礎、宗教哲学

宗教多元性の問題(第五講)：リチャーズ

「本質 - 現象」の枠

2. 形而上学・倫理学との区別

宗教の本質について(宗教本質論・第二講) 「直観・感情」

1)直観

有機体的な統一的な宇宙、スピノザ的

無限と有限：表現、象徴

2)感情 「それは多様性と個性とを象徴にした無限で生きた自然という根本感情」「無

限に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」
「聖なるあこがれ」「内なる本性の呼び掛け」

3)直観と感情

4)形而上学と道德

3. ロマン主義

2 - 3:まとめ

宗教・信仰の直接的場へ

「感情」「直接意識」 宗教現象学へ、方法論的にも(単純化・抽象化)
人間性における宗教 弁証神学、宗教の本質概念(本質論から現象論へ)

「感情」から「認識」「行為」へ 人間の存在構造における宗教性

これは、信仰を精神の諸機能の一つの特定機能としての知性、意志、感情
のいずれかと同一視することの不十分さを意味する。むしろ、これらの諸機
能を統合した人間精神(人間理性、人間存在 = 実存、人間性)における本質
的な可能性として宗教・キリスト教を理解すること、その上でその特殊な実
現としてのキリスト教的信仰の意義を論じることが、要求される。

実定性 個別的で歴史的な諸宗教への定位

cf. 理神論

<文献>

- 1.コプルストン 『ドイツ観念論の哲学』(以文社)
- 2.ティリッヒ 『ティリッヒ著作集別巻3』(白水社)
- 3.シュルツ 『近代形而上学の神』(早稲田大学出版部)
- 4.レーヴィット 『ヘーゲルからニーチェへ』(岩波書店)
- 5.カント 『宗教論』(思想社)
- 6.シュライエルマッハー 『宗教論』(岩波文庫、筑摩書房)
- 7.イエシュケ 『ヘーゲルの宗教哲学』(早稲田大学出版部)
- 5.西谷啓治 『宗教哲学 - 研究入門 - 』(『西谷啓治著作集第六巻』創文社)
- 6.大橋良介 『絶対者のゆくえ』(ミネルヴァ書房)
- 7.田丸徳善 『ドイツ観念論と宗教の問題』(『講座ドイツ観念論』第六巻・弘文堂)
- 8.大峰 顕編 『神と無』(『叢書ドイツ観念論との対話』[5] ミネルヴァ書房)
- 9.プレーガー 『シュライアーマッハーの哲学』(玉川大学出版部)
- 10.武安 宥 『シュライエルマッハーの教育学研究』(昭和堂)

3 : オットー

3 - 1:オットーの立場

近代宗教哲学における宗教・信仰の合理化に対する反論

神の合理化・合理的宗教 ヌミノーゼ

感情への着目:シュライエルマッハーの継承

非合理的契機へ、聖なるものに対する感情的反応の記述(宗教現象学)

カント主義

宗教的アプリアリという問題設定

人間理性におけるアプリアリな構造における宗教性

広義におけるカント主義と言える。 宗教哲学におけるカントの意義

3 - 2 : 宗教的アプリアリと感情

カント主義のモチーフから、宗教的アプリアリ

- 1) 神に関する事柄の単一性 真実さ聞き手の宗教的良心(ア・プリアリな判断)に訴える
- 2) ヌミノーゼ経験の能力は人間精神のアプリアリに内在する (= 普遍的である)、可能性としての普遍性と現実形態の多様性・特殊性
- 3) 「合理的精神のアプリアリな範疇としての聖なるもの」と「現象界に現れた聖なるもの」との区別 宗教現象学と宗教歴史学、構造と過程、論理と歴史現象認識論と心理学との関係(トレルチ)

3 - 3 : 宗教・信仰における合理的契機と非合理的契機との関係性

「図式化」: 非合理的要素から合理的要素への展開、合理化、道德化、人間化

恐怖 礼拝、戦慄 聖なる畏怖、ヌウメン 神性、聖 善

合理的要素と非合理的要素とは、アプリアリな原理に従い、宗教史的発展の中

に現れ、そして前者は後者を図式化する

合理化のプロセス(宗教史 = 宗教的素質ある精神の歴史)

図式化と歴史性との関係

リクールの「悪の象徴論」

よごれ・しみ・けがれ 罪

罪責

不純 恐れ

神の前における具体的状況

内面化・主体化

神の怒り

責任性

原罪・奴隷意志

「聖なるものは複合的範疇である」(183)

合理的要素(絶対、完成、必然、本質) + 非合理的要素:

想像力の問題

図式化の問題 = 合理的概念的レベルと具体的イメージのレベルとの結合の可能性をどこに求めるかという問題 想像力の問題

感情・直接的内的経験(非合理的要素の含む)という信仰の基盤の問いを、具体的に展開する方法論: 象徴 - 感情 - 身体性 - 存在論という問題連関

3 - 4 : シュライエルマッハー批判

第3章、第20章、第21章

a: 絶対依存の感情には、「否定」の契機はない

b: 「依存感情 神(ヌミノーゼ)」ではなく、依存感情はヌミノーゼ経験(戦慄)に伴う主観的で随伴要素・作用

c: シュライエルマッハーの「絶対依存の感情」は宗教に関しては狭すぎる

3 - 5 : 聖なるものの経験の構造

圧倒的な力の経験: 反発力と吸引力との同時作用

4 : ユング

省略

<まとめ>

宗教・信仰の直接性、生の場への接近
信仰の合理的、非合理的な諸契機の内的連関
「信仰 = 感情」における主体的実存的契機の欠如
宗教本質論・宗教の本質概念という問題から現代宗教学へ

<文献>

1. ユング 『ユングの象徴論』(思索社) 『元型論』『続・元型論』(紀伊国屋書店)
『ヨブへの答え』(みすず書房) 『ユング自伝』(みすず書房)
2. ノイマン 『意識の起源史』(紀伊国屋書店)
3. 湯浅泰雄 『ユングとキリスト教』(人文書院)、『宗教経験と深層心理』(名著刊行会)
『歴史と神話の心理学』(思索社)
4. 渡辺 学 『ユングにおける心と体験世界』(春秋社)
5. 河合俊雄 『ユングの分析心理学』(岩波講座 現代思想3)
6. ヒルマン 『元型的心理学』(青土社)